モンゴル民族学校に教える「モンゴル語」
―甲・乙式学級用の「モンゴル語科の学習指導要領」の比較から

ムンクバト

発表要旨：

内モンゴル自治区（以下内モンゴル）におけるモンゴル族学校は教育言語の違いから甲式・乙式学級に区別されている。それは、モンゴル語を教育言語とするものと、漢語を教育言語にするもの二つである。その違いから教科書、カリキュラムなど様々な面で相違点があると推測される。発表者は両学級の小学校におけるモンゴル語教科書の内容について同一学年においてその比較を行っており、テキストの内容や難易度など様々な点で相違があることを確認した。しかし、それは断片的なものであると考えられる。そこで、甲・乙式の両学級における「モンゴル語科」について「学習指導要領」から考察を加えたい。その比較から甲・乙式で教えられている「モンゴル語」について如何なるものかを考えてみたい。

甲・乙式それぞれについて『モンゴル語文授業標準』という資料がある。それが日本の「学習指導要領」にあたるものである。両方を詳しく分析する。甲式用の『モンゴル語文授業標準』（2005年）と乙式用は『モンゴル語文授業標準』（2013年）で、ともに『モンゴル語文授業標準』研究査定グループが作成し、内モンゴル自治区教育出版社から出ている。甲式用は3章にプラス付録から構成され、55ページである。乙式は3つの章から構成され、32ページである。

内モンゴルにおけるモンゴル人にとって「モンゴル語」の教育について都市部と牧畜地域や教育言語の違いというようないくつかの視点からみてきた。まず、甲乙式学級は教育言語の違いから教育過程において様々な違いが生じると考えていた。次にモンゴル人学生を対象にしてモンゴル語と漢語の二種類の教育言語があることを把握してから、そこで教えられる内容にどのような違いがあるかを探ってきた。それに加えて、今回は両方の「モンゴル語科学習指導要領」の比較を通して、モンゴル語そのものが母語か第二言語かによって異なった指導要領がつくられていることがわかった。甲式において、いわば一般のモンゴル人に対するモンゴル語の学習は指導要領に明記されている通り、モンゴル語の読み書きが基本的なスキルとなっている。モンゴル語の学習において「標準語」あるいは「母語」を用いてモンゴル語文を考えることが前提になっているといえる。片方で、乙式に対する「モンゴル語」の学習とは、最初の段階から「モンゴル語」が「第二言語」という枠中で査定、計画されていることが新たに把握できた。その分、甲式に比べて教科書や授業内容の難易度などに大きな差があることがみて取れる。